



カントウータ

Cantuta No.19

平成 24 年 10 月 1 日発行

目 次

- | | |
|----------------------|---------------------------------|
| 1. 事務局からのお知らせ | 4. ボリビア生まれの詩人ペドロ・シモセとの再会と訳詩集の出版 |
| 2. ウユニ塩湖のリチウム開発と産業人材 | 5. ボリビアの片田舎で 第2回ボリビアがくれたメッセージ |
| 3. ボリビア観光の近況 | |

事務局からのお知らせ

1. 平成 23 年度定時総会開催

日時：平成 24 年 5 月 28 日（火）PM4:00~5:00

場所：ラテンアメリカサロン

決定事項：

1. 平成 23 年度決算書の承認
2. 平成 24 年度予算書の承認
3. 事務所の変更

現在横浜市港北区大曾根 2-7-9 に置かれていた事務所を東京都港区西新橋 1-23-9 河野ビル 2F（株）海外移住旅行社内に変更する。

事務局 TEL/FAX 042-673-3133

4. 法人移行の方針決定

現在当協会は公益法人であるが一般社団法人に移行する方針とする。定款が出来た段階で臨時総会を開催し承認を求める。

5. 役員を選任

宮田次郎理事の辞任に伴い、松崎治夫氏を新理事とし、また空席の専務理事に杉浦篤氏を選任した。また、山下徳夫名誉会長、田中茂相談役が退任された。

6. eメールの活用

今後会員への公式の連絡等において、会員の意を確認の上、電磁的方法を取り入れていく旨提案があり了承された。

7. 平成 23 年度活動報告

①ボリビア移住百周年記念誌スペイン語版出版準備。

②在日ボリビア人、在ボリビア日系社会との交流・国本・杉浦両理事ボリビア各地日系社会訪問（平成 23 年 8 月~10 月）

・沖縄ワールドウチナンチュウ大会に白川会長・長嶺理事参加（平成 23 年 10 月 13 日~16 日）
・在日日系人・ボリビア人出稼ぎ者集住地域の訪問とネットワーク作り

・東日本大震災への支援金手渡し

③ラパス日本人会 U\$5,000 サンファン日ボ協会約 U\$45,000 サンタクルス中央日本人会 約 U\$17,000 を海外日系人協会経由で被災地 3 県に手渡された。

8. 平成 24 年度事業計画

- ホームページの情報更新
- 会報カントウータを年複数回発行
- ボリビア移住百数年記念誌「ボリビアに生きる」のスペイン語版の発行
- 文化交流イベント、セミナー開催等取組み
- 平成 25 年 4 月 1 日発足を目指した一般社団法人への移行

2. 平成 24 年度臨時総会開催

日時：平成 24 年 9 月 20 日（木）PM4:00~5:00

場所：ラテンアメリカサロン

決定事項：

1. 一般社団法人移行に伴う定款の変更の提案があり、全員一致で承認された。
2. 「ボリビアに生きる」スペイン語版翻訳・出版契約書署名権限を杉浦専務理事に委譲の件、承認
3. 5月以降の協会活動報告

ウユニ塩湖のリチウム開発と産業人材

山形大学大学院理工学研究科
准教授 綾部 誠

2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、日本国内ではエネルギー政策の転換が叫ばれるとともに、脱原発への動きと自然エネルギーの利用拡大に向けた機運が高まっている。また電気自動車(EV)やハイブリッド自動車の新規開発・生産・販売に加え、電力不足と計画停電に備えた家庭用・産業用の蓄電池の開発と普及が急速に進んでいる。

現在の日本における電力事情の課題は、電気が必要な時に、必要な分だけを発電するということができ、気温が上昇(或いは低下)し、工場がフル稼働する昼間に電力消費量が増加するため、この最大電力消費量を如何にして、その時に賄うのかということにある。しかし比較的電力消費量の少ない夜間の時間帯に発電した電力を蓄電池に溜め込み、これを必要とされる昼間に利用(放出)することができれば、電力発電の平準化が達成され、電力不足に悩む日本にとって問題解決の大きな第一歩を踏み出すことになる。

このように震災後、ますます注目されている蓄電池やバッテリーであるが、その性能や能力からしても、当面の間はリチウムを原材料とするものが主流になるであろう。なぜならリチウムを使った電池やバッテリーは、高密度エネルギーという特徴を有し、既に安全技術と生産技術が確立しているからである。

今後、日本だけに限らず、世界的にリチウムの需要が拡大すると見込まれている。これに対して供給面は、既存の生産会社が増産を図ることによ

り、ある程度までは賄えると考えられているが、調査のなかには2018年頃に需給バランスが均衡するという見方もある。また上述したような震災以前には予想していなかった蓄電池の急速な普及(需要増加)なども考えられ、産業立国である日本にとって同資源の新たな供給先と安定的な資源量を確保することが求められている。

このようななかで注目されているのが、ボリビア多民族国にあるウユニ塩湖である。ウユニ塩湖には、世界埋蔵量の半分程度のリチウムが未開発のまま眠っているとされている。詳細については本誌の17号(2011年)において述べたとおりである。

その後の同国におけるリチウム外交の状況については、2011年8月に中国が「ウユニ塩湖のリチウム産業化のための研究・開発に関する覚書」に署名し、2012年6月には、ポスコを中心とする韓国のコンソーシアムがリチウムイオンバッテリー(正極材)の生産において技術提供を行うことが、ボリビア政府との間で正式に合意されたと報道された。このように報道を見る限りでは、ボリビアのリチウム開発に関しては、韓国と中国が日本よりも協力関係を強化しているようにも捉えられている(他にも技術協力を検討している国もある)。

ボリビアのリチウム開発については、これまで同国政府が発表しているように、3段階に分かれている。第1段階はリチウム生産技術の開発、第2段階はリチウム生産設備の建設、第3段階はリチウム資源を用いた産業化である。既に合意を取り付けた韓国や中国は、いずれも第3段階における技術協力に関するものであり、ウユニ塩湖の塩水から如何にして経済的に高純度のリチウムを分離・抽出するのか、またどのような分離・抽出プラントを建設するのかという技術が未構築である点に問題が存在している(勿論、日本にはリチウムの電池・バッテリーの製造に関する技術は企業を中心に集積されている)。この技術を確立できなければ、電池やバッテリーの製造技術はあるが、

原材料をボリビア国内で調達できないということに繋がりがねない。



パイロットプラントの外観

チリにあるアタカマ砂漠とは異なり、雨期が存在し、マグネシウムなどの不純物の含有量が多いウユニ塩湖から高濃度で安価なリチウムを取り出す方法について、いまボリビア政府は技術開発に取り組んでいる。日本も両国間の首脳合意に基づき、独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）を中心に、ウユニ塩湖の湖畔にあるパイロットプラントにおいていくつかの異なるリチウムの分離・抽出実験を行っており、その成果が期待される場所である。

このような状況を背景に、ボリビア側と日本側の技術開発の状況を現地調査するため、2012年7月にサンアンドレス大学、山形大学、トマスフリア大学の共同調査という形でパイロットプラントに赴き、鉱山開発公社（COMIBOL）の全面的な協力を得て技術調査を行った。具体的な調査内容について本誌で詳細を述べることは差し控えるが、ウユニ塩湖からのリチウム抽出にあたっては、気候や原料の特殊性に配慮した形での新しい技術開発が今後、求められることになるであろう。

一方で、リチウムの産業化までを視野に入れた場合、技術協力・技術移転に加えて、人的資源の開発が求められることになる。今後、分離・抽出プラントやバッテリー・電池の生産工場を建設し、管理・運営するにしても、リチウムに関連する知識と技能を有した人材を確保できなければ独自生産は困難となる。この点について山形大学では、

学術面で支援を行うこととしており、東北大学、京都大学、秋田大学と連携しながら、今年度から人材育成を開始している。本学の包括的学術協定校であるサンアンドレス大学から研究者を客員研究員として招聘し、リチウムに関わる技術研修を4大学が協力する形で実施している。同研修は今後のボリビアにおける自己完結的な人材育成を見据えたものであり、リチウムの分離・抽出技術から電池やバッテリーの製造、リチウムを用いた応用技術など、幅広い分野で研修を行っている。

また人材育成に関しては、今後もボリビア政府の協力が欠かせないことから、既に京都大学で1年にわたって研修を受けた鉱山開発公社の職員（2名）を訪問して、これから求められる技術教育の内容、研修後の就職、共同研究の在り方などについて意見交換を行った。



京都大学の元研修生との会合

リチウムに関連する人材育成は、これからも日本の各関係機関と調整・協力をを行いながら進めていく予定である。日本が得意とする研究開発力と教育ノウハウを用いながら、ボリビアと日本の双方が将来的に利益を享受できるように、今後も尽力したいと考えている。

ボリビア観光の近況

株式会社ラティーノ

代表取締役田中純一

本年入会させて頂きました（株）ラティーノの田中と申します。宜しくお願い致します。弊社は今年で設立20周年を迎える中南米専門旅行会

社ですが、同時にその専門性から自らの顧客のみならず、日本全国の手配業者として長らく営業を続けてきました。

さて、そうした長年日本からのボリビアへの観光という視点で見えてきた者としても、この1、2年のボリビア（いや正確にはウユニ塩湖）ブームはにわかに信じがたい程の活況を示しています。従来、日本からボリビアへの観光客と言えば主流は隣国ペルーへのいわゆるインカ帝国ツアーの後半、マチュピチュ観光後ペルー側チチカカ湖畔の観光をしながら湖上の国境を越えボリビアに入国し、ラパス及びその周辺観光を1、2泊して再びペルーへ戻る、あるいはそのまま帰国の途につくという行程が一般的なものでした。しかしながら、その一般的なルートもその後のペルーの観光ブーム（世界遺産マチュピチュ人気）到来と共にペルー1カ国でのツアーが主流となり、さらにはその低価格化が拍車をかけ、日数そして価格も高額になりがちなボリビアを含めたツアーが敬遠され近年まで推移してきました。

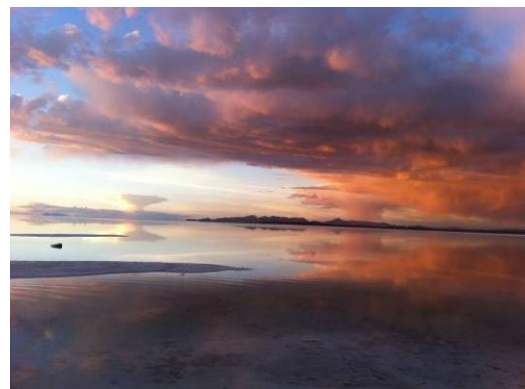
現在人気のウユニ塩湖は古くから観光地として知られてきた場所ではありますが、そのアクセスの悪さと、現地受入れ側のインフラの問題（簡単に言えばホテルの質）もあり日本からは主に長期滞在のいわゆるバック・パッカー向けの観光地として知られている程度でした。そうした状況の中、ペルー人気も一段落し今やマチュピチュ遺跡は秘境でも何でもない人気観光地となってしまった後、TV等で次なる海外ロケ番組の目玉の一つとなったのがウユニ塩湖でした。とりわけ一面真っ白な塩の世界というよりも、雨季に見られる塩の上に水が張り、それが鏡のような役目をし、空や周りの景色を写し出すような幻想的な景観が注目され、それがTV等で紹介されはじめると、『地球最後の絶景』あるいは『一度は見たい大絶景』などのフレーズと共にメディア等での露出が高まりました。

そして、更には人気のファストファッション・

ブランドや清涼飲料水のCM等に使われその認知度は飛躍的に高まったのです。現在のウユニ塩湖は他の人気観光地が迎った流れと同様に推移しており、現状はその導入部分としてのピークを迎え、これから本格的な人気観光地へと向かうところにあると言えるでしょう。実際、ここまでは個人単位での旅行者が主流であり、TV番組やCMのみならずあの幻想的な景観を自分も体験したいという感度の高い旅行者を中心にジワジワと人気が出てきていました。特に、その鏡面化と呼ばれる巨大な鏡のような景観を楽しむ事のできる現地の雨季

（1－2月）頃は既に人気ホテルはかなり込み合っている状況です。

そして、もうひとつウユニ人気に拍車をかけているのが、このホテルいわゆる「塩のホテル」の事で、以前から塩のホテルはありましたが、衛生面などで若干問題視されていた部分もあったのですが、近年新しく建てられたいくつもの塩のホテルはこういった問題もクリアし、ウユニ塩湖で採れた塩をブロック状にしてテーブルやベッドはもちろんのこと、壁や床さえも塩で作られ話題性も高いホテルなのです。



幻想的なウユニの光景

この、別名世界最大の鏡とも呼ばれる雨季のウユニ塩湖が演出する幻想的な景観と、塩のホテル、そして夜ともなると街明かりのないこの塩湖では晴れた日には降りそそぐような満天の星空を満期できるという、ロマンティックな状況により個人客を中心に人気が出てきているのです。特に特徴的なのは南米では珍しくハネムーンの方々に支持を受け、弊社でもウユニに行く個人客の3割程

度がハネムーンという状況になってきております。そして、このウユニ塩湖を目指す旅行者のもう一つの特徴は、今までのような人気のペルー旅行の延長として考えているのではなく、ウユニだけ、あるいはボリビアだけで日程を組む傾向にあるという点です。この流れは我々南米専門旅行会社にとっては非常に歓迎すべき流れであり、今までとはまた違った客層が入ってきた事を示しています。



トリッキーなウユニで撮る写真

また、このような右肩上がりの日本からの観光客を後押しするかのよう、陸路に於いては長距離移動を余議なくされていた現地道路事情の改善＝時間短縮、さらには念願のラパス～ウユニ間の定期便就航などにより、いよいよ個人旅行者から徐々にグループ旅行者にも対応できる環境が整いつつあるのです。

今後は、こうした空路移動などを使う事により今までのアクセスの悪さを補い全体の旅行日数の短縮化に繋がり、さらに団体で動く事での旅行の大量生産化＝コスト・ダウンと流れて行きそれが、更なる需要喚起へと繋がり本格的な人気観光地へと認知されていくのです。さらには、ある程度団体旅行が認知されていくと、各旅行会社はそれぞれ独自性を打ち出そうとして、ウユニ塩湖だけでなくスクレやポトシ、あるいはカーニバルで有名なオルーロなどと結びつけた独自の旅行商品を企画するようになり、ボリビア観光の底辺の拡大という意味ではますます期待が持てる流れになって

いくと思われま

一方でこのような、急激な旅行客の増加は新たな問題も含んでおり、人気観光地特有の観光客が残していくゴミの問題、まだまだ団体客を迎え入れるには十分とはいえないインフラの問題、そしてさらには旅行社の増加と共に確実に現地にお金が落ちていくのかという雇用の問題も含んでいます。中南米の観光地でも良くみられる観光客は増えているのにも関わらず、中々実際の現地にはお金が落ちず大手資本に搾取されてしまうような仕組みが出来てしまい、それが地元住民や現地労働者の頻繁なストライキなどに繋がってしまうという構図です。

これらは、我々のような一企業だけで、どうこうできるレベルの話ではありませんが、願わくばこうした予想される旅行客の増加が決して十分とは言えないボリビアの観光産業の更なる発展と共にウユニをはじめとした各地観光地の雇用に促進し、現地にもお金の落ちる仕組みが作られて行くことを望みます。

私ども一旅行社としては、今できる事として、正しい現地観光情報を発信しつづけ、魅力ある旅行商品の開発と提供に努力していき、一人でも多くの日本人のお客様にボリビアの素晴らしさをお伝えし、旅行して頂けるよう努力を続けて行きたいと考えています。

ボリビア生まれの詩人ペドロ・シモセとの再会と訳詩集の出版

日本ボリビア協会理事
細野 豊(詩人)

昨年(2011年)8月にスペインのグラナダで開催された「月桂樹の中の詩祭2011」に招かれ、16日と17日の行事に参加して約500名という多数の聴衆を前に、スピーチと自作詩の朗読行う機会に恵まれました。そして、詩祭参加の帰途マドリドにち寄って、ボリビア生まれの日系詩人で現在同市在住のペドロ・シモセに会い、彼の詩の和訳と日本での出版を承諾してもらうことが出来ま

した。彼の詩については、数年前から和訳して、ある詩誌に連載を続け、3年ほど前に大方の翻訳を終えていたのですが、出版についてはなかなか目途がつかないでいたところ、最近になって偶然具体的な話が持ち上がっていたところだったのです。8月14日の日本出発以前に、幸い彼と電話で話すことが出来、同月21日にマドリッドで会う約束を取りつけました。

当日ペドロは、わたしが滞在していたホテルへ訪ねてきてくれました。対面するや否や彼は、わたしに1冊の芳名帳を見せ、「あれから11年ぶりだよ」と言いました。そうです。2000年10月に彼は、林屋永吉大使（駐ボリビア大使、駐スペイン大使等を歴任、前当会会長）のご尽力によって外務省の招聘で来日し、日本の詩人たちと交流したのです。マドリッドで再会したその日は、ホテルの近くのレストランで軽い夕食を摂りながら懇談し、「あなたの詩集『きみはそれを信じないだろう』（2000）の全部、『リベラルタとその他の詩』（1996）の9割以上、『詩』（1988、それまでに発行された詩集の集大成）の半分以上を約3年前に和訳し終えているので、日本での出版の承諾書をいただきたい」と持ちかけたところ、即座に好条件で承諾してくれました。わたしはその場で承諾書の案を作り、浄書したものを、翌日ペドロが自宅へ昼食に招いてくれた折に持参して署名して貰いました。彼は、すでにわたしが和訳した彼の詩の全部又は、わたしがよいと思う詩を自由に選択して出版してよいと言ってくれました。そして、わたしは帰国後、早速訳詩集出版の準備に取りかかり、今年の10月に現代企画室から出版される予定となりました。

ラテンアメリカの数少ない日系詩人たちの中で、ホセ・ワタナベ（ペルー、1945～2007）と並んで最も重要な詩人がペドロ・シモセです。彼の詩は、日本語を含む13ヶ国語に翻訳・出版されています。ペドロ・シモセは、1940年3月30日、ボリビア国ベニ州リベラルタで、日本（山口県）からの移住者、下瀬甚吉とリベラルタ生まれの日系女

性、ライダ・カワムラの長男として生まれました。幼少年時代をリベラルタで過したのち、1959年19歳のときにラパス市のサンアンドレス大学に入学しましたが、その頃から詩才を発揮し、種々の賞を受けました。中でも重要なのが1997年に授与されたキューバの「カサ・デ・ラス・アメリカ賞」でしょう。1964年には、フランス政府の奨学金を得て1年間リールに留学し、ジャーナリズムを学びました。この留学中にマドリッドへ旅行し、そこで知り合ったロサリオ・バローソ・サルガード嬢と1966年に結婚しました。（今回自宅へ昼食に招いてくれた折には、ロサリオ夫人の手料理でもてなしてくれました。）

1970年代の初めに、ペドロはボリビアの左派政権をクーデターで打倒した右派軍事政権に反抗したため、国を追われてスペインへ亡命し、その後ずっと家族とともにマドリッドに住んでいます。ペドロが2000年来日したときに語ったところによれば、その後の政権交代に伴ってボリビア政府は彼に謝罪したとのこと。そして、最近は何年に1度か2度はボリビアを訪れるとともに、サンタクルスの新聞「EL DEBER」に評論を連載しています。今回のわたしの訪問についても、8月26日付で「マドリッドへ来た細野豊」と題して、友情の籠った記事を書いてくれました。

最後に、彼の最新の詩集『きみはそれを信じないだろう』から官能的な詩2篇を掲載して締めくくりといたします。日本の農民としての誇りを高く持ち続けてきた父のことを書いた彼の代表的な詩『わが父の伝記』はすでに他の雑誌等に何度か発表し、インターネットでもご覧になれますので…。

絶頂 ペドロ・シモセ
 おまえの吐息はわたしの腰を揺すり、
 おまえの性器は
 あの世の楽園で
 開花する。
交合

おまえの中でわたしは空^{から}になる。
激しい火の中で燃えながら
生まれるために
おまえの中で死ぬ。
おまえの中でわたしは完全に怒張する、
この大異変に
揺さぶられる、
おまえの限りある肉体の中で
死んでしまいたいと
願いながら。

(細野豊訳)

ボリビアの片田舎で

イルパイルパのパロキア滞在記

第2回 ボリビアがくれたメッセージ

横須賀市市立諏訪小学校教諭

梶原ふゆ

高校の授業

ボリビアの学年末は11月。学年末試験に合格すれば12月から休みに入るが、落第すると補習や再試験などを受けなければならず、それでも不合格になると留年が宣告される。この間に学校では人事や次年度の計画などを決めなければならず、新学期は2月から始まる。私もボリビア生活に慣れ、スペイン語で何とか意思の疎通ができるようになって来た一年目のこの時期に、シスターが思わぬことを提案してきた。次年度からシスターは、村の高校で受け持ってきた宗教の授業を引退したいので、代わりに私にやってみないかと言うのだ。私はもともと小学校の教員だったので、ボリビアでも小学校教育に携わりたいという思いはあったが、一飛びに高校で教えるとは。しかもその村の高校生というのはお世辞にもお行儀が良いとは言えず、いつか放課後の高校を見に行ったことがあったが、教室にはいくつか壊れかかった椅子と机が生徒達が帰ったままの状態と雑然と放置されており、黒板には落書き、紙くずやお菓子のごみなどが床に散らばっていた。従来パロキアのボランティアの多くはこの高校で宗教の授業を受け持

ってきたようだが、スペイン語もままならない私がまさかそんな役回りを要求されるわけがない、こんなところで教える羽目にならなくて良かったと勝手に安心していたのである。躊躇している私にシスターは、「そんな弱気な態度でどうするの。高校生に宗教くらい教えられなきゃだめよ。」と言う。シスターとは一悶着あったのだが、結局私は次年度から高校生3クラスの宗教の授業を受け持つことになってしまった。

村の高校生の多くは、毎晩のようにパロキアへ来ていたので既に顔見知りだったが、彼らにとって私は友達だった。一緒に遊んだり、おしゃべりしたり、時々宿題を手伝ったり、実際には年齢はずっと離れているのだが、まるで級友のように関わってきた。私の不安は、果たして彼らが私を先生としてみてくれるのだろうか、こんな関係の中で授業など成立するのだろうかということだった。この不安は的中した。私が教壇に立った最初の日、生徒達は面白がって授業どころの話ではない。ローリーポップやポテトチップスを食べながら口笛や野次を飛ばし、紙飛行機が飛び、平気で遅れて入ってきたり、注意をすると拗ねたふりをして教室から出て行ってしまったり……中にはいかにも気の毒そうに見守ってくれている心優しい真面目な生徒たちもいたが。

パロキアに帰ってから私はシスターに訴えた。こんな状態ではこれからの一年間が思いやられると。するとシスターは同情のかけらも無く「あなたがそんなチャラチャラした態度だからいけないのよ。もっと先生らしく振舞いなさい。生徒達の敬意を勝ち取るかどうかはあなた次第なんだから。」と言う。ストレートにものを言うシスターとは何度も衝突してきたが、この時ばかりはシスターの言う通りだと思った。ある意味自己満足的な、生ぬるい友達関係ではなく、彼らを教えていく立場へと自分自身が変わらなければ、実際私がこの村に居る意味もないわけだ。

言葉とは裏腹に、シスターは親身になってこれからの対策を一緒に考えてくれた。そして次の日、

シスターが高校に出向き生徒達に話をしてくれた。宗教も正規の教科なのだから、真面目に取り組まなければ落第しかねないと釘を刺すことも忘れずに。午後になると、パロキアまで先日の態度を謝りに来て、態度を多少改めた生徒もいたが、そう簡単に奇跡が起こるわけもなく、授業は相変わらず学級崩壊並みだった。毎回祈るような気持ちで授業に望んだが、大抵は上手くいなくて、くやしさと無力感との闘いの日々だった。時にシスターに愚痴をこぼすと、「そんなに駄目なら、皆に迷惑をかける前に早くやめなさい。」と言われ、そう言われると返って意地が出てきたりした。保護者会でも、宗教の授業の様子を話す時間をいただいて家庭での協力を求め、そのことを教室でも生徒達と話し合った。

高校生を教える技術も持たず、言葉も上手く操れなかった私は、とにかく彼らと素で向き合うしかなかった。生徒達の中には、孤児や親のいない人もいた。確かに私は、彼らとは生い立ちの全く違う、恵まれた国から来た一時的なボランティアに過ぎず、彼らの多くは私が体験したこともない苦労や傷を背負っていたに違いない。でもこうして出会った彼らと、宗教の授業を通して生きることについて一緒に考え、大切だと思うことを伝えたかった。

みんなで歌った「ビリーブ」

高校生がパロキアへ来る時は子ども達とは違い、携帯やアイポッドを手に、すきのない流行の私服姿で現れる。一見皆が裕福な家庭から来たかのように見えたが、そうではなかった。彼らの多くは週末や休みに働きに出る。住み込みでベビーシッターをしたり、無免許で知り合いから譲り受けたポンコツ車でタクシーの運転手をしたり、危険でも儲かる仕事で稼いでくる人もいる。今風の服に最新の携帯、ロゴ入りのキャップを被ったどこから見てもイケてる高校生がある時ポツリと言った。「子どもの頃は辛いよね。お金ないから、いい服も着られないし、欲しい物も買ってもらえない。だから貧しいってことがバレちゃうんだ。オレも

そうだった。」

彼らには自然界に生き抜くようなたくましさがある一方、自尊心が低く、命に対する感覚が軽いように見えた。傷つきやすく、劣等意識が強い。自尊心が低いゆえに他者への敬意が持てず、互いに傷つけあって争いが絶えなかったり、自棄酒に走ったり、自殺未遂も珍しいことではなかった。いつか生徒達に「信頼できる人や友達はある？」と聞いた時、殆どが「いない」と答えた。みんな自分中心で本当に自分を大事に思ってくれる人などいないから誰も信頼なんてしてないと言う。そんな年齢なのかも知れないが、ある意味、本心でもあるようだった。

カトリック国の宗教の授業は日本の道徳のような位置づけだったが、ただ神様やイエス様の話をするだけでは、思春期の生徒達にとってはどこか遠い国の無関係な話に過ぎないようだった。初めはただ教科書に沿って一方的な話をし、生徒達は黒板を写したり書き取りをしたりするだけで、お互いにちっとも楽しくなかったが、他の宗教の先生に教わったり本を読んだりして、授業のあり方を根本的に考え直してみた。宗教の授業が果たす役割について気づいたことがあった。肌の色や育った家庭や名字までもが、生まれながらにして差別の対象になり得る社会環境の中で、神様の前では人の価値は同じだという教えは、少なからず生徒達の中に自尊心や平等意識を育ててくれるかもしれない。私もそんな願いをもって授業に臨むようになった。

生徒達が日常直面している生き方の問題と宗教の授業を結びつけてみることにした。自尊心、友情、家族、愛について……彼らにとって身近なテーマを取り上げ、自分達で台本を作って演じてもらう。その後、聖書の言葉を読んでみんなで考えていくというやり方だ。そのやり方は生徒達も喜んでくれて、皆でパロキアに集まり、和気藹々と台本作りや劇の練習に励んだ。もちろん一朝一夕ではできず、ふざけすぎて練習どころではなかったこともあったが、その頃にはいつの間

にか、生徒達も私を先生として見てくれるようになっていた。

年度末も近づいた頃、敬老会のイベントに向けて私たちのクラスは出し物を出すことになった。何をやりたいか生徒達に希望を聞くと、日本の歌を歌いたいというので、日本では小学生がよく歌っていた「ビリーブ」の歌を紹介し、歌の一番は日本語のスペイン語訳を歌うかわりに二番はみんなで作詞することにした。例によってなかなかまとまらなかったのだが、生徒達が作った歌詞の中にはこんな言葉もあった。「どんなに逆風が吹いても、あなたの存在は私の進む道を強めてくれる。」「私たちは価値ある人間として、本当のことを伝えていこう。本物を信じよう。」幼い頃からどんな思いを抱えてきたか、またどんな現実の中で生きていくのか私にも想像できない彼らの心にも、輝いて生きていく希望と夢があり、幸せを求めているのだ。

皆で考えた歌詞をつけて、放課後パロキアに集まって歌の練習をした。約束をしても守られないことで散々悩まされてきたが、この日は全員集合した。イルパイルパから歩くと一時間以上かかる集落に住んでいる生徒達も馬でやって来た。宗教の授業としてどれだけ妥当か疑問だらけの不完全な授業だったが、こんな生徒達とのひとときが、私を励まし、救ってくれた。

クリスマスプレゼント

学校が終わり、12月に入ると、パロキアは一年で一番忙しい時期を迎える。村中の子ども達を集めて、神父様と一緒にクリスマスの準備をする約一ヶ月間のイベントが始まるからだ。毎年行われるこのイベントを私たちは CERENA と呼んでいた。CERENA のメニューは歌や踊りや観劇、ゲームや工作だが、ひとつひとつにテーマがあって、それらの体験を通してクリスマスを理解し、心の準備ができるように考えられている。これらを準備したり、劇を披露したり、子ども達を盛り上げたりするリーダー役を担うのは私たちボランティアはじめ村の高校生や青年達だった。このイベント

を子ども達はとても楽しみにしていて、パロキアは毎日大勢の人たちで賑わった。

しかし CERENA に参加できるのはイルパイルパ内の子ども達に限られていた。村から一時間以上も離れた集落に住んでいる子ども達は、大きな川を越えなければならなかったり、畑で働かなければならなかったりして、パロキアまで通って行くことができなかったのだ。ある日、一人のお母さんが訪ねてきて、向こう岸の子ども達にも CERENA をやって欲しいと言ってきた。青年達と相談して一日だけミニ CERENA をやろうということになった。誰かが借りてきた小さなバンに大きなスピーカーをつけて音楽やゲームや工作用品一式を詰め込み、ある日曜日、青年達数人と川の向こう岸へ出かけた。向こうの子ども達は一層恥ずかしがりやで、音楽を鳴り響かせて走る私たちの奇妙な車を何事かという目で眺めていたが、そのうちに少しずつ、最終的にはほぼ全員の子も達が広場に集まった。そこに住んでいる高校生も手伝ってくれて、クリスマスの本を読んだりドッチボールをしたり折り紙を折ったり、一緒に楽しい時を過ごした。



CERENA の仲間たちと

最後にクッキーを一袋ずつ渡した時、子ども達はどこか不満げな様子で、一人の子がボツリと、「プレゼントはないの?」と言った。私たちは懸命に、こうしてみんなで過ごした時間がプレゼントなんだよ、と説明したがどうもみんな晴れない顔をしている。イルパイルパに帰った私たちは、何となく心が重かった。あの子達の気持ちが痛い

ほど分かった。プレゼントなどほとんど貰った事がなく、一年にたった一度のクリスマスでさえ、もしかしたら何も貰えずにすごしてきた彼らは、私たちが来たとき、プレゼントを届けに来たと思ったのだ。イルパイルパの子ども達は恵まれていた。セメント工場のコボセが毎年貧しい子ども達のために箱いっぱいのおもちゃをパロキアに届けてくれたからだ。でもそれは、向こう岸の子ども達の分までは無かった。

何とかしてあの子達にもプレゼントがしたいと思い、私たちは頭をつき合わせて考えた。そこで思いついたのが、村中のお金持ちそうな家から寄付を募ろうということだった。早速次の日から大き目のジャガイモの袋を担いで、もう着なくなった服や使わなくなったおもちゃの寄付を頼みながら、家々を回った。思いのほか、村の人たちは快く協力してくれた。ちょうど庭に干してあった洗いたての靴や服をそのまま渡してくれた人、子どものために買ってあった服を分けてくれた人、袋いっぱいのおもちゃを届けてくれた人、何もないからと言ってお金を渡してくれた人、お菓子をどっさり届けてくれたお店屋さん、大切にしていたおもちゃを思い切ってくれた男の子や遊んでいたお人形を手渡してくれた女の子・・・数日の間に、たくさんの人達の優しさと一緒に、コボセから届いたおもちゃ箱よりもどっさり寄付が集まった。クリスマスくらいは良い物をとってくれたに違いなく、集まった物はほとんど新品同様に良いものばかりだった。

クリスマスの朝、私たちは6時にパロキアに集まった。小雨が降る、寒い朝だった。神父様が出してくれた車に乗って川の向こう岸へ出かけた。朝早くから音楽を鳴らした怪しい車が呼び集めると、家々からは寝起きの子ども達が裸足のまま飛び出してきて、中高生や大人まで集まった。小さい子順に並んで、自分にぴったりのサイズの服を合わせてもらっている時の子ども達の顔は何とも嬉しそうで、おかしやおもちゃも貰って、皆小走りで家に帰っていった。

パロキアに帰った私たちは、朝食に温かいココアとパンを食べた。言葉で言わなくても、お互いに満足だった。何か大事な仕事を終えたという安堵感と一体感があった。クリスマスミサを知らせる鐘が鳴った。ミサに向かう頃には雨が上がり、雲の間から薄日が差していた。次年度からサンタクルスへ派遣される予定になっていた私にとって、このクリスマスの思い出は、親しんだイルパイルパの人達と過ごした最後のプレゼントだった。

エピローグ

その後私は、サンタクルス州のサンヘルマンに約3ヶ月滞在し、2010年5月、二年間のボリビア生活を終えて帰国した。私の特異な夢を誰よりも理解し、信頼をもって応援してくれた両親と兄、待望していたボリビア行きを可能にし、私のために祈り、現地では親のように見守り諭してくださったイエズス孝女会のシスター方、手紙やメールでエールを送ってくれたり、ボリビアまで私を励ましに来てくれた日本の友人達、そして私を受け入れ、共に生きてくれたイルパイルパやサンヘルマンの方々、また、短い間にたくさんお世話になったサンフアンやサンタクルスの日本人の方々…本当に多くの方たちに支えられた二年間だった。心から感謝の気持ちを捧げたい。

会員計報

元当協会相談役田中茂氏死去 (元和光市市長、朝霞厚生病院理事長) 7月13日享年86歳にて永眠されました。 謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

このところ朝晩涼しく、秋めいてきました。今号でも色々な形でボリビアに関わっていらっしゃる会員の方々の活躍をお知らせできたらと思います。
(編集委員)

白川光徳 杉田房子 細野豊 金田正敏
細萱恵子